新元号「令和」は、「Beautiful harmony」ではない――序にかえて

平成」最後の月、四月三日のことである。複数の海外メディアから、新元号「令和」の「令」の字は「命令（command, order）」の意味を指しているという趣旨の報道がなされた。あわてた日本政府はそれを否定し、「美しい調和（Beautiful harmony）」を意味していると反論した。しかし、四月二二日、文部科学省の中等教育局長が全国の都道府県教育委員会教育長等に「天皇陛下の御退位及び皇太子殿下の御即位に際しての学校における児童生徒への指導について」という通知が出され、時の内閣は閣議決定して、五月一日に学校、会社その他において国旗掲揚の協力要望をしていたという、現実に「命令」がなされていた事実に鑑みると、先の海外報道があながち「誤報」だったとも言えないのは皮肉であった。

右の政治的な意図はそれとして、新元号「令和」の翻訳語が「Beautiful harmony」ではあり得ないことを、学術的な立場からは明確に否定しておくべきだろう。なぜならば今回元号の選定に当たり、従来の「漢籍」からではなく、初めて「日本古典」『万葉集』が典拠に採用された

という事実が、何より重要だからである。例えば「漢籍」を典拠とした「明治」から「平成」と、当該『万葉集』を典拠にした「令和」とは、どのように異なるのだろうか。「明治」から「平成」までは漢籍が典拠であったため、ほぼ「漢語」同士の組み合わせの構成であった。ところが、「令和」は「日本古典」であったために、「漢語」だけではなく、「漢語」と「和語（やまとことば）」との組み合わせとなってしまったという事実である。

例えば「昭和」と「令和」とは、音読のうえではまったく同一である。しかし、漢籍を典拠とする「昭和」は、「百姓昭明、協和萬邦」。百姓昭明にして、萬邦を協和す。」と『書経』にあるように、「昭」（漢語）＋「和」（漢語）の組み合わせで構成されている。だからその「和」には、（harmony（調和））という訳語も適用されようし、この場合間違いとは言えないだろう。

しかし、「令和」は「昭和」とはまったく異なるのである。「初春令月、気淑風和。」初春の令月にして、気淑く風和ぐ。」「令」（漢語）＋「和ぐ」（和語）の組み合わせで、「かぜ」が、「やはらぐ」意。少なくとも「やはらぐ」「やはらぎ」の訳語に、「harmony」は無いだろう。ちなみに「令月」の「令」も、「よいつき」、この「よい」は、縁起が良い、くらいの意味合いだから、（Beautiful）のニュアンスも無いに相違ない。『万葉集』を典拠と主張する限り「Beautiful harmony」は、とんでもない誤訳なのである。ちなみにローレン・ウォーラーは対案として、「Good

gentlness」や「Favorable calm」を提案しているが、いかがだろうか。

さて本書の表題『万葉集の散文学——新元号「令和」の間テクスト性』は、挑発と異化作用を狙ってのネーミングである。周知のように『万葉集』は和歌集だから「韻文」のジャンルではあっても、「散文」であろうはずはない。しかし、「韻文学」では意味をなさないのだ。なぜならば「令和」の典拠となった箇所が和歌本篇ではなくて、「梅花の歌三十二首併せて序」、その序文の部分であり、それが「散文」だからという理由である。元号の典拠を端緒に、そこから『万葉集』の間テクスト性＝テクスト論的研究の可能性を提案する趣旨の企画である。

第一部はゲストに万葉学者の上野誠氏をお招きし、迎える側として高知県立大学の教員と元教員というスタッフ構成で、「シンポジウム新元号「令和」の典拠を考える—万葉集の散文学—」を敢行、その模様を掲載した。第二部は、『万葉集』のテクスト論、『文選』の日本における受容論、元号をめぐっての政治的な思想論を掲載した。なお、シンポジウム当日、パネリストの一人が体調不良で欠席というアクシデントに見舞われたが、「ヨースの部屋にようこそ」というコーナーを設けることで、相互に対話する機会を得ることができたのは幸いであった。

企画コーディネーター編者代表　東原伸明

〔発表Ⅰ　大宰府文学圏の思想――万葉集と令和〕……上　野　誠

発表資料

1 大宰府文学圏の思想 ——万葉集と令和

上野 誠

大宰府言さく、「この府は人・物殷繁にして天下の一都会なり。子弟の徒、学者稍く衆し。而れども、府庫は但五経のみを蓄へて、未だ三史の正本有らず。渉猟の人、その道広からず。伏して乞はくは、列代の諸史、各一本を給はむことを。管内に伝へ習はしめて、以て学業を興さむ」とまうす。詔して、史記・漢書・後漢書・三国志・晋書各一部を賜ふ。

（『続日本紀』巻第三十、称徳天皇、神護景雲三年（七六九）十月条、青木和夫ほか校注『続日本紀 四（新日本古典文学大系）』岩波書店、一九九五年）

はじめに

筑紫歌壇→天平の文学サロン（互いの思いを述べ、競う）／大宰府文学圏（文学の環境としてとらえる）

一 大宰府文学圏の特性

① 官人（役人）の文学

我が主の 御霊賜ひて 春さらば 奈良の都に 召上げたまはね（山上憶良 巻五の八八二）

憶良らは 今は罷らむ 子泣くらむ それその母も 我を待つらむぞ（山上憶良 巻三の三三七）

② 友と酒の文学

賢しみと 物言ふよりは 酒飲みて 酔ひ泣きするし 優りたるらし（大伴旅人 巻三の三四一）

君がため 醸みし待ち酒 安の野に ひとりや飲まむ 友なしにして（大伴旅人 巻四の五五五）

韓人の 衣染むといふ 紫の 心に染みて 思ほゆるかも（麻田陽春 巻四の五六九）

趣旨なんです。

そうすると私は、この大宰府文学圏の特性をどう見るか。四月、東原先生からメールが来て考えました。これはどういうふうにすればいいかな、と。

私が考えた性格というものを五つここで挙げたんです。一つは、これは役人の文学。役人の文学であるということは、ここに都というものがあって、ひな、田舎というものがあって、それが互いに交流をしていく。

そこに文学的な営為というものが生まれる。紀貫之がやってきてさまざまな交流をして、任地から帰るときにはものすごい数の宴会をやって帰っていく。その宴で交流がある。基本的に万葉の時代でしたら、国司に対して郡司という実務をやる在地の人々とどういうふうに交流を図るのか、歌で交流を図るのか、そういうような役人の文学としてこれをとらえなければいけないと思います。大伴旅人は大納言として平城京、奈良の都に戻ることになりました。その宴会は図書館でやったんです。その図書館でやった宴会のときに、山上憶良が、あえて私の「私懐」、私の心の中にあることを述べますと言って、旅人さん、あなたがもしお帰りになったら、あなたのコネで私を九州大宰府から平城京に戻してくださいね。「我が主の　御霊賜ひて　春さらば　奈良の都に　召上げたまはね」。私の主、旅人様、あなたの御霊、温情にすがって、春になったら私を奈良の都に召し上げてください。これ、コネで就職したいという品性下劣歌。ところがそういう読みは浅いんです。土屋文明は何と言っているか。みんなの前で露骨に言うならばそれは笑い歌となるであろう。これが深い解釈。私を戻してくださいね、平城京へとみんなの前で歌ったらこういう芸当ができるわけです。

次に行きます。こんなこともあるんです。「今日は宴会を早引けする。」「えっ、もう早引けするんですか。」「うん。あのな、俺は七〇なんだけれども、大宰府に愛人ができて、子どもができて、その母親も俺を待っているから。」「憶良らは、今は罷らむ　子泣くらむ　それその母も　我を待つらむそ」。これも、役人というのは同じメンバーで何回も宴会をしているか